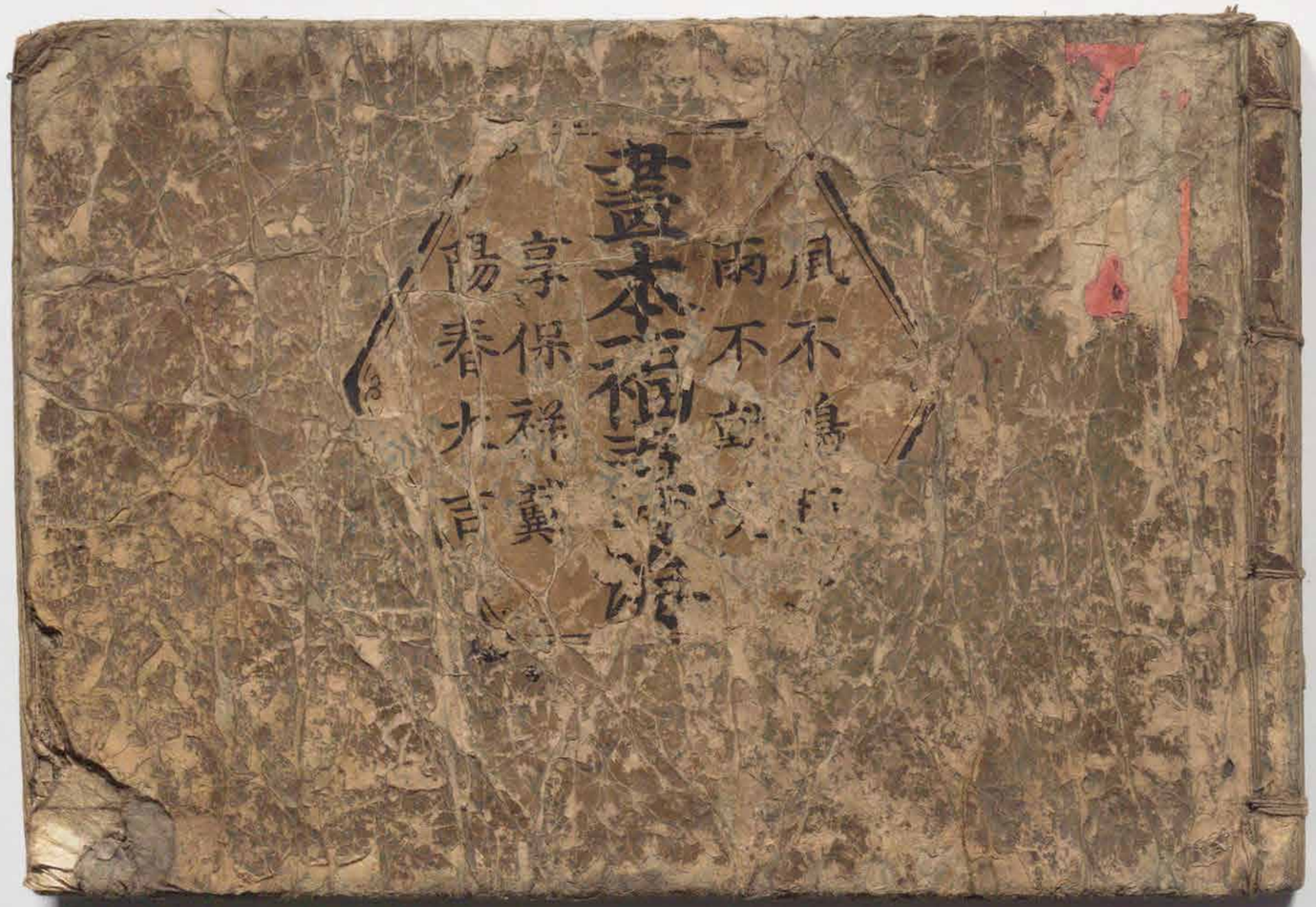

風不息
雨不
畫本
享保祥
陽春大

序

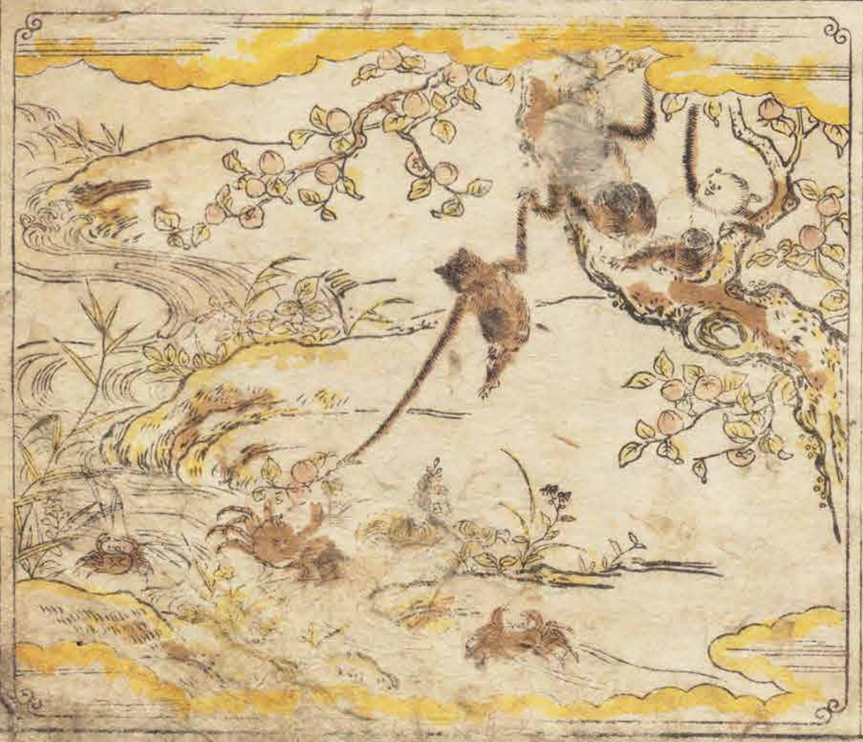
易曰、納約自牖。牖喻通明之處。蓋人心有所明有所蔽。其所通者明處。所蔽者暗處也。教人之道。自其所明導之則。其言易入而。其教亦成矣。如此福壽海者。實取於斯。欲使童蒙之輩。知和漢故事。乃先設画圖略記其大意。失童蒙之所玩賞者画圖也。就其画圖使求其所以画圖者。此即自其所明導之意也。書既脫藁。来請序為誌作者之微意耳。

享保十一六。龍集乙亥正月吉。筆於括囊堂

畫本福壽海惣目次

日別命追國神　大禹懸器求言
太祖切髮置田　栖輕奉勅摘雷
尹房疎九輪釜　長安士女探花
武帝會渴說梅　撰好惡脫兩肩
龍得硯水降雨　兩兒道路論日
明帝幼言有奇　鄒忌直言告王
能因隱黑顏色　三子會風姿術
漢人因磬發句　元之應聲對句
長房投杖化龍　葛玄吐飯作蜂
丁固夢松登位　元振引糸定妻
表叔書授異人　梁國婦人趣史
顏回占知子貢　梁君將得善言
道虔買筆送盜　行成卿勝扇合
玄翁向石示偈　康賴孝思達洛
忠常受命入坑　王濟謀斷李樹
孝廉作贈會怪　韓朋先生連理
東坡減食發語　蛇報恩西母柩
孫臏用策勝賭　陽君釣魚量寵
少孺偽偷諫王　劉邦路斬白蛇
常盛押弟取馬　能因節信互感
菅丞相幼賦詩　大臣宗輔收蜂
堀川院聞召政　大井子水口石

孔明製麺祭神　二子相戯難忍
古人投鱠化魚　彦章奮勇自殺
愚人称孝殺父　李渤誰何経意
王播壁間賦詩　一僧水畔拾椀
羅敷彈箏感王　李信愛犬免死
韓娥歌廻梁間　李守中見長壽
井谷菊水延齢　西行憤集飯東
童子鐘楼摘鬼　橘右馬乞脱難
兎謀鰐魚渡海　八町馳追教盛
朝雄以歌感鬼　高重遇示進勇
経正常嗜風雅　重忠岸投重近
赤松長山爭勇　市中欺人歴死
鄧夫人傷増妍　孔子絲穿九曲
嫗氏瓔中出猿　法善斬人作酒
祀一子生四種　惣計七十有三



○日別命追國神

文伊勢の國ハ。神武天皇天の日別ね命に勅詔あるて曰。天津方宜有其國印標劔を賜日別勅を奉りて東より入事数百里ゐして。其村ゝ神あり。伊勢津彦と云。日別問ゝ曰。汝が國ハ天乃孫ゐまゝんや。答て曰。吾此國を求て居住るゝ久し敢て命に隨ゝ日別即五瑞紀して戮ゝん。此故ゝ畏伏て曰。吾國を天の孫ゐ奉りて。吾敢て此所ゝ居ゝ日別乃曰。汝が去れ時何を以くゝ驗とせんや。答て吾今夜八風を起し海水を吹波浪を挙て方に東ゝ向ゝんとす。是則吾都也日別兵を整足を竦に中夜ゝ及ぶ頃大風四方ゝ起て波濤を挙。光耀て日のめぐ陸海ゝ朗也遂ゝ波に乗て東に去。古俗ゝ曰。神風伊勢の國ハ常世浪重浪寄の國ゝ蓋此謂也。詔て曰。宜く國神の名を以て伊勢と号べし。是實ゝ天孫の威ゝ事貴重ゝて國神ゝ云ども欲ゝ名ゝ

○大禹懸鐘求言

夏の禹王姓ハ似名ハ文命。鯀の子。顓頊の孫なり。嘗く位ゝ在時。楹門の外ゝ鐘鼓磬鐸鞀乃五ゝ樂器を懸置て。天下四方ゝ告て曰。寡人ゝ教ゝ不道ゝ以ゝ治ゝ する者ハ鼓を打。論ゝ義を以ゝ する者ハ鐘を撃。告ゝ事を以ゝ する者ハ鐸を振。諫ゝ憂を以ゝ する者ハ磬を鳴し。獄訟ある者ハ鞀を搖ゝ。此五ゝ物響ある毎ゝ禹王ゝ出ゝ朝ゝ出ゝ其言を聞ゝ。故ゝ下方民乃ゝ一毫も隔塞ゝ所ゝ無ゝ

○太祖切髪置田

魏の太祖兵数万を率して出馬ありけるに。時麥熟し早苗青くうして生ずる。諸軍に命じて馬に麥を喰せしむる者は刑せんと定む。法令皆恐れて馬を下る。只公乗る所の馬驚くに人と起くに麥熟せに蒐入。太祖の馬驚くに人と起くに麥熟せに蒐入。数くして麥を損ぜり。太祖曰吾けだと聞て我馬はを殺る。何を以て法令をなすべき。吾亦今日大将なり。人れ衆を率る者方べ如くして自其髪を切て麥田に置

○栖軽奉勅擒雷

雄略帝の御時。小子部栖軽といへる人あり。朝参して大安殿に入る。帝后妃と戯れ遊ぶ栖軽が目久しく孤ぬる雷電する命。勅して勅して曰。卿雷神を取来れと。栖軽馬を馳て阿部の山田より返て豊浦寺に到り。天に仰ぎ大に呼ぶ曰。

吾朝の虚空也。豈吾君公無やんや。速に降り来り。速に追。其雷果て豊浦の飯岡の間に墜。栖軽雷神を輿に乗せて還り奏す。雷神目をいからし鬚を怒。其光室に照て。帝恐れて幣帛を送り給て其所を今も雷れ岡といふ

○平房疎九輪釜

或人二條の平房に宿して茶釜進ずるに怪しみ驚て密に問ば。茶釜一と旗さを結ひ付て後。茶の具一式中に此釜ひ家日ありけど。所のといふ秘蔵ありて釜ぞ。やたざり申す者ども。そもいつる所釜ぞと問ば。主賢くも法師ぞ。茶を結付ける。是九輪釜とて中頃までの世にありし。今は希くなり。人ひ希くなり。苦けり。

佛い此金い昔師恭が所為にて九稱の宝
形を鑄直しうるわや行んと其義なりべいと無へ
なし志い切角に行れども悪人の賞しる物を
愛せんるるるるたに河に普通する釜の湯
に茶のこ行んて行に其釜を跡に
ぐ〻。家内すぐこれ仏緒なり〻〻

○長安士女探花

唐の玄宗の時長安の士女吾も〻と花
を種。希う歌ぬぐいをうつく寄とす。若
孫ある舎い千金にうつく是を座に移
と。正月の末より皆馬車に駕く弥の弟
花を尋ぬ是を探春の宴とす

○武帝舎渇説梅

魏の武帝諸軍と共に小道に惑い候雑を
過る小谷渇して水を求る小得ど已に息
逼て〻く進む事なし武帝詭て曰行先に
梅の林あり。實甘く酸うべし。是紙嗜んと
思て。疾行に我宮い入る。各足を開に舌
潤い口水津たまりて。やのだう息をつぎ
進けるぐ小。遂に清川の流に舎く。
實に渇を止ぐ〻〻

○撰好悪脱両肩

齊の國に二人の女あり。両隣より是紙乞。
其父母女に告て〻く海東の隣へ行んと思て
左の肩を脱べし。西の隣へ行んと云て右の肩
を脱べし。女問て。則両肩紙脱其故を問み。
女の曰。東の隣い家富て男る醜し。西り
隣い形好して家貧しい。父大り第一

○龍得視水降雨

上寺小持経堅固の僧あり。毎に一人り翁
来て聽問と。或日僧問いぶくれんで翁の
曰。吾い此麓に住竜也。久〻く旱して。

潦を得ては出て来りて注を開。僧の曰。若
し心を注て雨を降と事紙深し。曰否。蓋帝
江洲を封じて水を施さば。僧の曰。若水を得ば
いん。若水一滴を得ば則泳さん。時に僧視の水
を示す。若真水と欲で帰る。ゝ及て雨降
車軸の如し。夜明てこるに。雨水皆墨也

○両兒道路論日

孔子東遊し給ふ道の傍に二人れ小児日戯
詩て曰。日の始く出る所いと人と相去事近し。
半天に至る遠し。朝に大なる車蓋
の如く。午天に小さ車蓋の如し。凡物近き
時は大にして遠ければ小也。是真理也と亦
一人れ日の始く出る所いと人と相去る遠し。
半天に至る遠し。日の始く出るや暑
午天に暑て湯を探るが如し。是近き
は暑く遠きは暑るゝ理也と。孔子聞給ひ。

完璧にして是非と変ずるを恐れ。辭を以て
一同に笑て彼の主の智あるといひぬる

○明帝幼言有奇

晉の明帝幼にして明智あり。或時父元帝勝れ
給へり。折節長安より使者来れり。王感く。
日と長安と何か遠き。明帝答て。長安は近
し。使実に来る。日は遠し。使来るを聞ず。
王感じて。翌日群臣を集めて酒宴をもよを
又昨日のごとく問給へ。明帝答へ。日は
近し。長安は遠しと。又王怪んで。昨日
と今日と答へ異なる事如何。明帝の曰。
仰て見れば日あり。仰て見るに長安いづくにか
し。日は近く長安は遠をうべずやと。父王
近花とこゝろ知を奇とす

○鄒忌直言告王

鄒忌は斉の国の相なり。其長八尺餘
豊に肥て美麗。或時衣冠を整へ
て鏡を取て妻に向ひ。吾と徐公といづれか
美なる。妻曰。君勝れり。妾に向て君勝れり。客
時客外より来る。客に向て君勝れり。客曰。
て徐公来れり。忌ひそかに徐公と見るに。実に吾
に勝れり。倚て案ずるの暇なし。則朝
に入て威王に見て曰。吾美い徐公に劣れり。
妻は私に妻は吾を私し。妾は私に客は我
に求しる心有て。皆吾を勝れりとす。其
斉の国千里。九城を私にせんとす。
朝廷の臣恐れとなる。四境の内王の貴
を。王感じて忌が言善。今日より群臣
吾過を諫く。其親に告る事あらば。必
禄を与へんと定たり

○能因陽思顔色

能因法師は生和歌を好。歌人の粋を得

けり。或時一首を詠ず
都をばかすみとともにたちしかど秋風ぞふく
白川の関と云句を叶へりとおもへ共、居ながら
にして詠ぜん事無念なりとて、奥州に下
向の由を披露し、一室に閉こもり、窓より顔
を出して日に晒し、数日の後登りけるを
とひくば此歌をおもしろきぞと、みな〳〵実り
奥に下向して八十島乃記を書ると

○三子占瓜妙術

陰陽の博士安部晴明。一日藤原の道長公に
して云、某の日家内に怪しあらん。御物忌有べ
しと。相國即門を鎖して情を絶て籠り
居て門を叩者あり。是を問に和州より瓜を
献ずと。則門を開く時に、僧勧修。大醫重
雅。晴明三子同く座に有。相國宣く家
内齋を此瓜喰べしや。晴明が曰。瓜乃中に
毒あり。相國許多の瓜何れに毒ありやと。僧勧修
則呪して加持すと。忽ち一箇の瓜轉躍。大醫
重雅。乃袖より一の金針を出して瓜を刺す。
忽ち動止ぬ。是を割てみるに、小蛇内に有
て、針其眼に中れり。都下三子の其術に
精き事を感嘆しあへりける

○漢人因磬發句

或貴家に法會あり。唐人二人來り独同
じく磬の後に八葉乃蓮を中にしてただ右
に孔雀を鋳附たり。唐人是を見て捨身
惜花思と唱ふる。今一人字わかつさて。
打不立有鳥といひける。満座の人其心
をしらず。或人密に是を解
身を捨る花を惜しとやおもふらん打ども
たゝぬ鳥もありけり。聞人感じける

○元之燕声對句

王之之い七八才の頃より文章工也。武時大
字平に詩句紙出て云。鸚鵡能言争似
鳳と。之を軽じ句を發しける。之之即
射く。蜘蛛雖巧不如蚕と。恥て止る

○長房投杖化竜

費長房ハ後漢乃人也。壺公に隨て仙術
を学び。竹の杖に乗る。其杖を塘の
上に投きい。即化して竜と成る

○葛玄吐飯作蜂

葛玄い秘道術を得て。一日客と並合
を客に曰。合中に奇特あるや。葛玄則
口ふくめる飯粒を吐出と。諸蜂となりて
客の鼻にひらく。心取付て人を刺る
し。玄まて口紙用ひ。その蜂元人に
半ば飯くかる。客拍掌是紙帝と
○丁固夢松登位

呉の丁固ぞ夢に松生じて腹の上に覆へるを
即人に語く吾十八歳をこえて必ず公と
なんと悔すて三公の位に至りけるぞ

○元振引絲定妻

宰相張嘉貞い女五人を持つ郭元振と
いふ美男有りて紙筆に望みて元振ゲ云
君数多れ中に其一美の勝れる紙得させべ言
由陪こべ必嘉貞五人何を勝り何を劣れ
と別事なしに子自絲を陪て妻と定む
べしとて五人の女名糸を結をそ羽平公廉の
内より秘し其端を出するふ元振其言よ
同じて糸をとりるふ才三の女を引得
るふ此女五人の中に美容とぐれ多美
兼なるとなりや

○表叔書授異人

表叔い異人に逢て数巻の書を授る曾
教て曰若一事に逢ば當に一幅を開べしや。
をいおぼく事ある毎に必是紙開さんるふ。
更に違るに或旦疾起く鏡を取髪を
ゆいるふ空り一物鏡の面に落其狀
蛇のごとくにして四足あり忽ち
病に卧て程なく空くなる其妻老物
の末数幅残りける紙開さんるふ悉く
白紙なる絲の一幅に鏡の面に蛇り
まぐうも秘る形を畫るり

○梁国婦人趣火

梁の代に一人の婦あり其家樊氏の子
二人五歳の二人室の中に有。婦走のく先兄
の子を救んとするふ得ずして五歳の子
を救んとるるに家に焼ける。婦大に叫んで五歳の
婦人を抱て出る。

名を得ずして何の面目あらんやとて。則
猛火へ飛のりて死と

○顔回占知子貢

孔子子貢を命じて他国に使せしむ。帰る事
甚遅し。子門人に告て占しむるに。鼎の卦
を得たり。皆いふ鼎は足なしといへば。遅き理
なれば未帰り来らずとや。顔子座に有。微笑
ていはく舟にて来る者は。足なくして運ばざれども来る
と。時に子貢わたりて来る。其故を問に
舟にて帰りぬといへり

○梁君猟得善言

梁の君一日野に猟し給ふに。家に居る一村
ある者。白雁を見て弓を取て既に矢を放んと
する所に。人来て道をとほりける故に。雁驚し飛
止るに随ひ。終に雁驚き飛去ぬ。君怒
て直に其矢を以て射殺さんとす。後に公孫

竜といふ者あり。ひざまづきて言。往昔宋の景公。
天下旱天して民飢ければ。星をとふに人を
殺して神を祭らば。雨必降べしと。景公再
拝して今雨を請る事。全く民の命の為
なり。然るを豈一人をも害して何の雨をか
求めん。吾当に身をもつて祭らんとて。其言
いまだ終らざるに。大雨頻に降て五穀を
成ぜり。君今雁を以て人の命を絶ん事。豺
狼に異ならずと。梁の君忽に悟て矢
を地に投。人は猟して禽獣を得。吾は猟
して善言を得たりと。大に嬉。公孫竜
と同車して帰り給ひける

○道虔買筍送盗

宋の沈道虔は。老て竹園に隠居せり。
初夏の頃。夜に至れば筍を盗む者あり。
価なる筍を数箇買求て。筍と書。

[illegible]と楽しみ悲哀して[illegible]を抜べ
[illegible]わべ市に買得て送るべしと盗
[illegible]を[illegible]に[illegible]る

○行成卿勝扇合

行成卿いまだ風流[illegible]れて[illegible]河扇合とこころの
有けるふ人と金銀を鏤珠[illegible]を[illegible]
[illegible]と[illegible]ふ此卿い一人黒く塗
[illegible]の[illegible]を張[illegible]
の[illegible]を真[illegible]
[illegible]て[illegible]

○玄義向石示偈

下野国那須野の原の殺生石は道[illegible]院乃
竜妃玉藻前化して白狐となる三浦の介
義純と[illegible]の後猶其霊石[illegible]
禽走獣[illegible]

死と此故に殺せ石と号く後深竹院の
御時に怪しき紙燭一丁を造り献を書
給へ玄義野列に至る日乃小石の左右
白骨累々として積翁破竈墮
機縁を拈じて曰汝既是石霊何處来
性向何収と亦偈を頌して曰
はく塵々端的底　本来面目未曾藏
現成公案大難事　異類中行任度量
言訖て拄杖を拳一卓下と石忽破碎数
片となる縁は怪異止み今世に石を破り
玄義と云具なり是より其の渭也とぞ

○康頼孝志達治

平康頼い藤原成親に従て潛に平家
乃族を滅さんと謀る事露く成往後定
と同じく鬼界が島に移さる居事三年康
頼都に老母あり且暮恋しく此の鎌倉に小
さき平都婆一千を造り献を書
とひ申さんとて
さま深沖の波に流し我れと報に告よ八重の白風
故々に此しく日々にて是に流と甚一の信に
ぐいありて是に流る遂に其賦其孝感を
義歎と後赦し免く雑帰る東山双
林寺に入く世事を絶と

○忠常受命入坑

冨士の麓に大なる洞あり人穴と号く仁田四
郎忠常将軍の命を受恩賜の汚
剱を帯く立ち入る洞の中に猟六人此穴に入る洞の中に猟
して踵をやぶると事あらず水流て足を
浸し臍して心神をいたましむ各相顧て
すむに蝙蝠面に飛さんぎり死事疾千万と
いふ教をたづぬ其先途大河あり遥浪
みなぎり落る火の光をぬのひろみ

人倫。郎等四人多ちに昏倒して死ぬ。
忠常が霊の教をうけ。帝剣を
河に投入。命を全して帰京。紐を
乃間一書を以て終る

○王涛謀断李樹

和嶠が園に李の樹あり。實赤く熟す。
嶠先ず食べ尽くして。人に施し与へど。若
子弟拒てこれを採食ば。其核を打く
價をとる。一日嶠が妻の弟。王涛とて
者あり。此樹を皆賣ば其價倍多
とやと問。嶠即行といふ。王涛やがて價と
打来り。少年十人数多の車に入
實を採。自他相共に服し飽て後。本紙
切枝を折。さてぐを束に積。彩ふ
して嶠に贈る。嶠大ひに
○孝廉作膳食経

南孝廉といふもの。善膳を作る事を
得たり。其細き事糸縷の如くにして。風
に吹ちるべし。或時客あるを含して客を
まねけ。吾義を養ひ難き事紙打ちいて。
膳を所作るに。風雨ふりて雷ふ
ちて。膳さらぐを忽ち蝶となる。孝廉
大ひに打ぐろさ。作る所の刀を折て誓
ふ再膳を作る事紙止る

○韓朋死生連理

康王の大夫韓朋が妻は。容色美麗
なり。康王是を聞て。邪よ奪ふ法
愛し給ふ。韓朋怨て場と死を
得ずして。妻も又夫を打ふの情ふく
共に死す。其遺せる書に。頸くは王宮
で妾が骸を。韓朋と同じく塚に埋
給へとあり。康王怒りて其儀を埋し。

二三夜を過く。梓の木二の墓れ上り生じ。根い土中に支え。枝い上に連る合。又常に二の鳥死あり棲悲鳴を呼り人夫婦れ精霊なると。哀んでこれを訓ど。此鳥を鴛鴦と名付。又低本と連理と云

○東坡減食發語

東坡へ黄州に迂されて且暑乃膳部も。肉一種酒一盃よりかゞる。若賓客を得ていこれを招くれば。頻其主人に告く。一辭一肉の外を割と。若ちこれを用いざる所へい往ざるべる。亦美に語を發して曰。一安分以養福。二寛胃以養氣。三省費以養財。といろ。是と東坡の三養とい。亦因に記と。孫真人が養生雑訣より。寡思慮以養神。寡嗜欲以養精。寡言語以養氣。是い真人が養生の三養とく。

世人身を衛ふ格言なり

○蛇報恩逆毋柩

會稽の謝祖といふ者あり。其妻初て男子を産汚し長二尺計の蛇をすてゝ便溺てゝ外に置ぬ。何地とも知ず失ぬ。数十年の後彼妻死す。時に西北の方より雨風大に起り一の蛇の十丈計なるが戸に入。其柩を三迴して頭を上棺と扣き両眼より血の涙を流し。良久して去り。是者なる蛇の。年を経て長大なるまゝ母の死せる狐恨こ。殯の霊前に来りて哀鳴叫ぶ也

○孫臏用策勝賭

孫賓斉の田忌が客たり時。公子名る田忌と立て基して。二人相並び三度馬を蒐て。早く的を射るの賭をなす。負くゝん者い千金を出すべしと也。孫臏謂て田忌に偶て曰。

吾一の策を用て必ず君に勝しめんと。遂に敵馬を引て出る。上の馬也。臏則下の馬を出て田忌に与ふ。忌即負ぬ。故に馬を出す。下の馬也。臏則中の馬を出す。忌即勝ぬ。故に馬を出す。中の馬也。臏則上の馬を出す。忌遂に敗ぬ。千金の賭を取ぬ。臏下の馬をもて神に負ぬる策と感じぬる

○陽君釣魚量寵

楚王の后竜陽君に甚愛寵ありて。君の寵九深し。或日戯て池の中に魚を釣。十餘魚を得ぬ。王其故を問。陽君答て言。妾はじめ魚一尾を得て喜る甚し。後まもなく多く得ぬ。今は唯魚を捨まく欲す。即ち捨ぬ。妾今寵を得ぬを図て四方嚢を裏て集る者多し。我大王亦妾を捨ぬ。此奥れ如く

ゆん事を量て欲くせしいてう洪を亡谷が
諫よ。安知沿容子。江袖泣前兎と作まり

○少孺偽偷諫王

呉王荆の囲を伐とす。其花少孺是を侍んと欲とし。止る者いい必刑人を也。此故に敢て
諫人なし。少孺即情よ彈丸を衣を搖く
後園よ出。其衣を露水沾して乃王の前よ
至る。王問て曰何の好よ衣を沾と事
かくのごとき。少孺拜伏して曰。後園乃
樹の上よ蟬あり。高く吟して露を飲。後
ろ螳螂あり。蟬を窺んとして身を屈
曲と。傍ら黄雀あり。螳螂を啄んと欲
して。羽をけくろ。樹の下に吾あり。彈丸を
持して。黄雀を窺んと事久し。満竹
露を含む。自五吾衣を霑と事と知
らざる。凡世人の万事皆かくのごとし。

得る事と知て後よ患のなる事と知ることと。
呉王宴。行く即晩て荆の囲を伐ると止

○劉邦路斬白蛇

漢の高祖劉名い邦。字季。沛の豊人也。
初帝にならざる時。豊乃西の澤中に亭に
酒を飲く。醉よ乗て夜中吾家よ帰
る。路よ人あり曰。前路よ蛇横ぬいたり。
過ん事欲とす。劉邦即劍を揮く
蛇を斬絶として進る。跡より従者進
む。告て曰。路乃旁よ老ある婆あり
大に哭と。其故を問。嫗の曰。五子は
白帝れる也。化して蛇となり路よあり。
今赤帝子れ為よ亡されると即其姿
を失う。劉邦是を聞て公甚よろこび
杯を飲て。後遂て西楚乃覇王を伐。漢
家四百餘年れ基本を開く。項王い金

傳ありて金の色白し。故に白帝子と云。高祖
の火德を以て王たり。赤色を賞と。故に赤
帝子と云。相曾が詠吏詩に曰
白蛇初斬路人通　漢祖竜泉血刃紅
不是咸陽将尾解　素霊那哭月明中

○常盛押第取馬

源の頼家公三浦三浦介義澄を宴
の次。朝夷奈三郎義秀。水練して海
底に潜て。今日海騎の名馬を賜り
くる。実に義秀が見れ常盛。是に応ず
中けるに。水練に成て第に及いとゝと。
相模に申あくい足乃験あるべし。哀海
馬を足弟の中に置く。相模のほ勝
負に任く。是をひさるべしと浮む。和泉益
入興ありて海底を潜ぬ。寄らる続ぐ。
足弟躍下。衣裳脱で相伴に真勢

定二王の紙付て万小黒くなれば。踏不の地震
動して人々目紙を見物と見て牛車
に多。教度よ及ぶども。五ツ時頃紙没せ
ど。義秀頻よ声を励し力を出さいさく
常盛雖仗の気色あり。江間兵衛尉の餘
て。矢を立て。両人の中に入さげて推
でて。休息の間。常盛衣裳をも
着ど。裸ナ〻〻件の馬よ乗る。駿
を拳逆鬼やう。義秀後悔とる事叶
ど。古れを人〻人永陸。教万一同り
物を放て参ず

○能因節信互感

加久夜の長弟力節信い。教寿の者うり。
好く能因法師よ逢々る小。能因綿の小
蓑を取おと。其中に鉋屑一筋を示て
曰。是い此我手負也。長柄の橋造り時の
鉋屑也と。ゆよ節信喜悦是を以て赤恨
中より裏物を取おし。是紙開くと乾
る蛙也。是い井堤の蛙して行ると也て
感歎して。各是を懐ふて退散を。今の
人々ハ。嗚呼と称とべきる。雅の至行を。
古き文も書伝人伝りる

○菅亟相幼賦詩

菅亟相い幼して頴敏也。十一歳の巳時。
父の是善卿。試て問ふ。是若詩を
作べ。寒夜れ即事を賦とべと。則
物よ応じて曰

月輪如晴雪　梅花似照星
可憐金鏡轉　庭上玉房馨

父乃卿是を聞ふ。是喜ふ

○大臣宗輔奴蜂

京極宗輔卿ハ。蜂をかぎりて飼ふ

夜何丸角丸と名を付く常に呼ひ
ならしいろ〳〵とうづいて集りける此故世に蜂
飼の大将〳〵と申けり。或いろ仕なる人乃
中に悪さ坊がりける者をば何丸何某と蟄
て来りて宮へ出て其所にて寄りあつまる。
出仕の時い車に乗上の物見よばるゝに
ゝる紙止まりて宮へ出ぬ〳〵歩りける。一日
鳥羽殿へ蜂の巣ふくろに落て出来
花ちりを人と整ひ〳〵と逃さいでゝ。
大花出おいみ〳〵る枇杷一房〳〵そ琴の
爪にて虫をしさ。高く内とられまぶ。
あるかぎりの蜂ども取付くちぐりしを。
則供人よ結ゝる。院かゝりて宗補ゞ
さてゝいてと感じさ勢給いける

○堀川院内召返

堀川院い未代の賢王にて法〳〵せ〳〵ま。

天下に雅楽と奏〳〵る申文を召有く。内
夜岳よ。赤御よ。内給で。あて接帝そて。
此事立べ〳〵此事重て問べ〳〵なぐ出よ
ゝ〳〵書付て決の日職事参〳〵る
給をゝ〳〵。實よ中ぐ〳〵ゝ内法事也或時場
門た大条の隆職事ゝく。大神宮の祭と
ト入ゝる。ふ出留を吹を給ひそ内返事も
かゝりけ〳〵ゝ隆向河院の内所ゝ参
て。内裏よい出物怪起をれて内ゝ。
出祈ゆ〳〵ま〳〵と〳〵ゝ院召給く。
内侍よ問を給いゝ〳〵ゝ去事ゝ
ど〳〵ゝ〳〵ゝ怪そて隆よ中る有ゝ〳〵。
其事に付ゝ〳〵ゝ一日大神宮乃祭を
参内〳〵ゝ〳〵ふ出留をわそ〳〵て勅答
かゝゝ。是出物怪ぐふ〳〵ゝ。かゝ〳〵
き事にゝ〳〵と〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

上げさせ院より四、仕由申させられいろう。
市返事に来るのはいろう。唯のものよいあるど。
角を秘曲を伸べく。其面を千返吹しとした。
為隆まうて事を奏しき。今ここ返よ成
られ吹くそ後ろ芳んとおしい行よ為隆い
ゆうり為りたう秘をたりるるるん。いと
和き事をりうるぞやさせ結いろう

○大井子水口石

近江国大井子と国えーい。世ようろれな
き大強力の女なるるり。田を多くれるる
ぐ。郡年六月九半。村人水分海ど。兎角
わそして。大井子が田よい水と入ざりろう。女
安ーびろい。夜ー行を面の廣さ二七尺計
なる石の四角なる筋。中ちくと打るり。彼
水口を動く。他の田へ行水を堰て。吾田へ
行ゆしたうらくろる。其且村人共ひて大よ

れどもき。石をし塗んと後合するに。百人
ばかりにても叶ぐらじ。たとえば田畑踏板
ぞべし。必何せんぞるとて。遂に大井手を隙
まして。今より後い田石に水をまうせ
りべし。此石を除くべと。俗々これば。たとえ
世わとんとて。亦これ有べ。色々とく
彼石をし除くり。出れより。ほい。永く水徧
とる事なしとて。田乃樵る事なるを
々り。此石今に神彼郡よりて。ある人
うのかを世ぐるさくるべを

○孔明製麺祭神

諸葛孔明。孟獲を征軍に勝て顔
欲を参し帰る。小瀘水を渡んとする。
風あく濤を挙て。渡る事叶ずど。人
皆曰。蛮い邪術多し。四十九人の首を斬
て。宜く神をまるべしと。孔明聞て。敢を
ぞし。師を班と。安ぞ二人をも殺とべ
き。吾一つの計あり。と。温飩の粉に羊
豕の肉を和。假人れ首と型し。祭文
を作て神にまるる。則風止浪静まて
渡る事成得たり。是饅頭乃始也

○二子相戯雑風

東坡国岳の日。秦少遊と會して酒宴
そ。矢談相交れ間。居士風を打得く
曰。是垢膩のまどる而也。少游曰。さらば
綿繁の咸所也と。互に雑じ争て逐よ
変ぜと。明日佛印和尚に語く。若其理の
曲者い実に一席を設べと。彼と已に別
て。少遊潜に佛印に行て。其事を述。明日
必師。綿繁より来べと。答に。後日傳託
温飩の数也を作く會とべと。いて去。皆
して東坡来れり。復前事を語く。

師祥ごく。垢膩ゝ生事と弁ぜよ。ゆゑに
冷淘切麺を以て報ぜんと。果て明日共に食
して出事あり。佛印の曰是を曉し易ゝ
事也。主風ハ垢膩を身ゝ繁の毛と足と
と先冷淘を吟ぐ。次に餺飥を含べ也
ゝ。皆掬掌大よ矣ゝり

○古人投鱈化魚

呉の孫權蜀くゝ舟を江に浮て鱈を食と。
其餘を中流に棄。則化して魚となる。長
僅に救す。ゆゑに筋のごゝ。鱈の形
あり。時の人名くく。鱈殘魚。亦呉餘鱈と云。
松江淞江の間に多くをいとう。赤越王魚
鱈を食して。僅を水中に投。其一扁活て
魚となる。是紙王餘魚也
鯉王餘魚い王餘魚也

○彦章舊男自殺

五代の世後梁の王彦章字はゝ明。其生
質驍勇にして。絶倫跳て棘を負行す
数里。且一の鐵槍。鐵槍の基重と。おて。馬を
池突奮疾事飛ごゝ。實くゝ言。
豹い死して皮を留む。人い死して名とゝむ。
其忠義天性也。後唐の軍兵て。兗州に
敗し。馬踣ゝ。ゝて軍敗を生捕る。
莊王其勇を惜ゝ。命を助ゝ。彦章
いゝく。臣い梁の恩を受ゝ事有し。死
やどんゝ報じゝ。ゝて自殺と

○愚人称孝殺父

至ゝく愚る人ゝ。佛を学んで其親ゝ
事ゝを問。旦暮ゝと顧る。夏の須蠅を
蚊ゝ。ゝ父の頭に集る。父ゝ怒る。
吾親の頭を踏事。蠅といても免べう
ばといつゝ。横槌を採ゝ蠅を打て。

其ことゝふ却彩しける。是注句譬喩注
て。況て。昏愚なる人乃偷とゝ世よいわく
ふそぐひの者しかねべきう

○李渤誰何注意

刺史李渤ハ専儒をゝく業す因よ故
宗寺の智大禅師よ向教中よ所謂茅子
丸須弥を容とつるゝ。是妄言ゝおゝどや
と。禅師の曰。世人傳曰。史君い萬卷乃
書ゝ徒ゝと是ゝうや。李ゝゞ曰。然ゝう禅
師則李渤ゞ頂より踵よ至るまで摩て
曰。海ゞ脆ゝして柳子のゝゝ徒とこ
ろれ万卷の書。いづまれ所よ向てゞ著ん
と。李渤首を地ゝ依ゝ不言

○王播壁間賦詩

王播微うゝ附貪賤ゝて。揚州乃木
蘭寺ゝ寓居して。僧よゝてゝい食ゝ。

命を助る事久し。後よ愛と去府自級後
の鐘を鳴して。筆を深壁の間よ書を

十度曜府九度空
巨耐園梨飯後鐘

と詩の上三句紙題して去。其後二十年を
過て。楊別乃鎮守に復本國寺にまり
住て。寺僧碧沙竈の中に右乃詩とのく
捨て。播磨下の三石を次

二十年前塵土没
如今喜得碧沙竈

○一僧水畔拾椀

巴堂の下巖院の僧。水乃畔よ青磁乃
椀を拾い得て。折花乃び米銭意り
去て。ふいて其中に湯。是より後富る事甚。
僧年漸老て。椀を江よ擲て其弟子に
謂。若此椀を遺し置ば。汝等及て罪

科を勝ん。吾是を怖るといえり。文選よ損金
於山況珠於淵。亦莊子藏金於山藏
珠於淵といえる。古人乃語り符合り
と欲じ者る

○羅敷彈箏感王

邯鄲に美女あり。姓い秦氏名い羅敷と云。
王仁ゲ妻也。或日出て桑を陌上よ採る。
趙王是を見て心喜で奪い取んとし
て。羅敷乃箏を彈じて陌上桑を。
別女の二夫を兼ぐる楽を作り。歌て以
て自慰む。趙王大に恥て退く。
杜甫ゲ詩に此意を横笛吞秋月
琵琶彈陌桑と作る

○李信愛犬免死

呉に李信純と云者あり。家に一乃犬を
養て黒竜と呼。常に甚愛と。或

時純がに出て酒を呑。大よ酔て藪の中に倒臥り。黒竜ハ傾居て傍を守る。家ふ太守鄧瑕猟よ出て足を知らど火を放て艸を焚。風はげしく火盛よ起り純が臥たる処よ近く。黒竜即純が衣をくハへて頻ふ引動かせども。驚破して更ふ覚まず。黒竜走りて一乃渓れ。五十歩ばかりでそさるふ行。水中に身をひたして急よ帰り来て。純が臥たる傍乃艸を沾す事数度。野火の至ふ其ほとりに至て消ぬ。犬ハ水をえらびくたびれんで斃死せるて。純目覚て是をみて。黒竜ハ已よ死して毛皆ぬれたり。四方の艸ハ灰燼と成。純其故をさとりて。大よ悔悲たり

○韓娥歌廻梁間

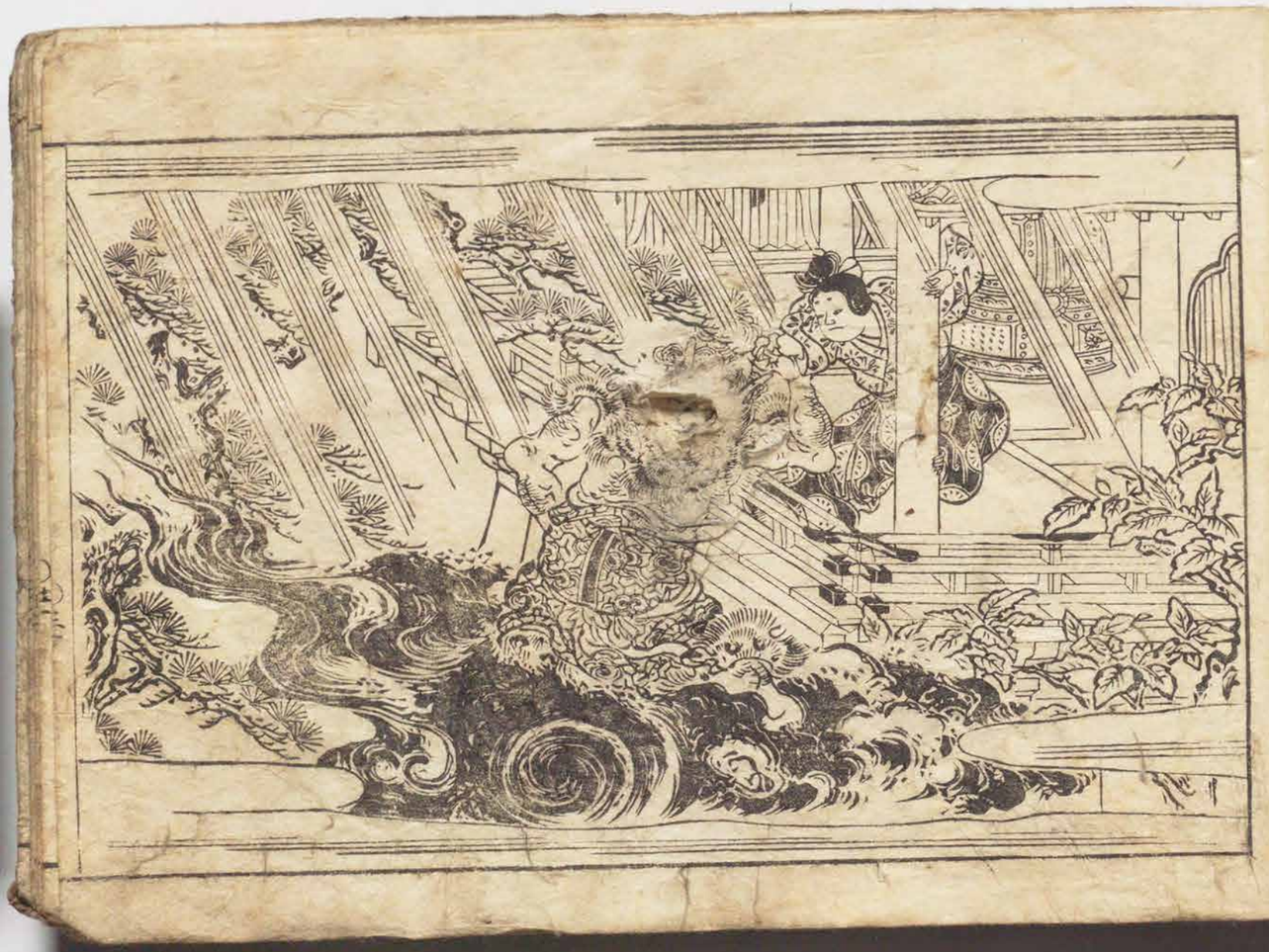
韓娥といふ人。東の方斉よ行て粮を遺し雍門といふ所を行て歌をうたひ食物を貰て去。其歌の響。梁の間をめぐりて三日不絶。此故り雍門の人ハ今に至てよく歌といへり

○李守中見長寿

太平興国中に。李守中といふ人。海を渉り濮州の界ふ至り。一人の老翁よ遇。年八十一。自ら楊遐挙といふ。李守中を迎へて其父を見せしむ。名ハ叔連。年百二十二也。其の祖を宋卿といふ。年百九十五。宗梁のうへに鶏の巣あり。其内に小児ありて頭を出し。李守中を下見て曰。吾ハ是九代前の祖也。語りける今ハ甚く年をとりて。朔ハ日 望ハ暮日 よ食子孫列坐して拝よ向のみといへり

○甘谷菊水延齢

南陽の酈縣。甘谷よ。菊潭水といふあり。其上よ大きなる菊ありて其香芳し。其花



落て水中に浮む。其谷中に家二十家あり。皆行くゝ人此菊水を飲ゝ上寿い百三十中寿い百歳下寿い七八十歳に至るなり

○西行憤集飯東

西行法師関東に在り須都よい和歌撰集の事あるゝ関東に詠せゝ方も集ゝ入ふるあるべゝとゆゝしく。吾妻の空に旅立。九月末に出むく路に。登蓮法師に会て物語るに。撰集やゝく成り。足下の歌漸く多くゝたるゝまゝ。西行鴨長明の歌い撰しゝ秋しゝや何よゝ云ゝしゝや集に入べゝ語る。西行関くゝゝのの撰集入るゝ足とゝて半途に引入して東にゝゝり出

○童子鐘楼橋鬼

元興寺の鐘楼に鬼ありて。夜毎ゝ人

を怪しみる。衆僧加持祈禱して力を盡
せども。曾て此災消やどまず。果てゝ
近頃より十二三の童子の登りて此寺
に宿けるが。甚だ異なる生質にして。紙
方八寸の石を投げたるに足痕地に
入事二三四寸なるべきの古狐ぬけたる怖
けるが。日所に請ぜて。五人今夜此妖を止
いて各悦び果を免と。其夜童子横
登りて法を行ふ。夜半に村中皆一とし
しなり。何となく物とゞろき。両目焼の
ごとく成る鬼形現ぜ来りて。中ごろ鬼出
頭を抓ゆるに。童子力を尽くし鬼に
てかに出んとす。寺僧いかんと。天
曉に及で。鬼去脱さんとすれども。童
子其髪を握りて。髪抜落ては
肉付。鬼い脱ぬ。先づ明の日に成り。

血をぬぐして行を見るに。ちるの陌れ上り。
昔悪奴を埋こゝろある止りけるこれ其
霊の鬼ゝ如ごとあるべき有るに。是より後
い妖永く絶て。彼髪い元真弓の家義
みれとして。其怪を書記し。累代相
伝ふるに。此童子い後に僧となり
因て。道場法師なるべし

○楢右馬元脱難

律の別当廉平い。天下無双の相人也。
楢右馬元といひし者に行逢て来り
ぜんとす。今我の内に命を失ひ申べき
災の相あり。楢右馬元仰天して。
いかゞ為べきと。其難を免るべきと請
ふに。平初の考に新て。
聊か事も有ぬ。方角を新て馬を乗さんとこゝい。考をとゞ刷る

小馬に何なりと主をみて叫び呼吟しけれ
げに嘶て立々れば。矢石放べき雨も笑ど勢方
をうつうつれば。吾妻大きうる法師にはうの
ヲ。打ゆく指うりけるを。鳴と射る其矢
わやまくど。妻の胸板ぐさと射通し。後の法
師よ鼠ぶくと立ちふ。ふたつ後やこの法師
頻よ勢さ。四方より血流をあり手泉のめく。
怪くしいきんろ。七人ばりの大法師。白
目を擁して居ぐるぶ。鎧る矢ぐ射ちまく
乱ぐる。続これを量知るめ。ぬて寄ぬして。
左馬允を人ぐ宵新さんと工ぐうめぬ
わりけ。廣平が指ぐぐるぬ神
のぶぐ〜ゆ人ぐらいぐるか

○免謀鮮魚渡海

付昔漢倭図竹草の邪ろ竹の林り
ぬる免行ぐる。みり舟俄ぐ江水部ぬて。

法を業。免ゆ方ぐて竹の根ぐ素なぐし
けぐ行ぐ。法師の竹ぐ名ゆ日を経て竹ぐ
かぐんぐ。海を渡ぐべき方法は。家ぐ
鮮魚ぐ。魚ゆ。免保ぐ。海ぐ鮮
何程多ま。鮮魚ゆメて。吾一新ぐ入て海
ぐ充満り。免五族ぐ。ふ湯。免海ぐ新
実ぐ多ぐ。ぬ竹ぐ氣ゆ。ま。集し
ぬ。吾一ぐ其報ぐ法ぐ海ぐ家の例
ぐ。ぐる事ぐ初ぐ。鮮魚ゆて千方
の親族ぐ呼集め。背を双べて渡ぐ
ぐ。免行ぐ仕ぐ。ぐぐ喜び。
其ぐ紙踏ぐて。ゆぐ海を行ぐ。
海ぐ。ぐて。吾海ぐ紙ぐ
ぐぐ。実ぐ海ぐ親族
の多ぐ紙ぐ。ゆどゆぐけ。
鮮魚ぐ大ぐ腹ぐ。ぐぐ。

とべき方をもて花梅くく海の底よりくる
ぐ其後箱暗して兎を捕つるの毛を
剃こゝる。今ごろをゆるくしのてけるに。
大己貴の神れ教よりて。蒲の花を
これらし。其ゝ仕くまつびそれで。
おのゞくを毛後せしびけることゝ

○八町馳追教盛

こ河守教盛ハ。保元の合戦より手負。
只一騎六波羅さして落るを。宮ハ
ゞ即先ハ八町馳追ゝて。大力のたてくる
あらこゝ上ゝ無る敵と。八町ゞ間より射つめ
首と取此敵よりを得くたの早れ宇
龍名の吹くゝ水くゝゞ吃と教盛と見行て。
ふゞと向ゝて追ゝけるゝ教盛しまた
のゝゝる小鬼合をく。龍ゞゞくゝけゝり
しゝゞ郎ゝく追付て。甲の天をて縛ゝと

おりけくすりを。教豊甲をうふけて。こ
こ度は四度くびをくれだ。ほのぶおりけて
をいてこ。教豊うるつ。とかと接て是を
ちくこよ。終よこ人びくうり切て八町沼高へ
作よ。ゆをれ。終よい甲にうるつ。四くち
うて六はれまでくけられる

○朝雄以歌感鬼

天智の時に。千方といふ者歌を。金鬼
風鬼水鬼疫神鬼とて。四の鬼を従へり。
風鬼は大風を起し。水鬼は水波あし。疫神
鬼は疫をめくし。金鬼は人をうけて
破れざれば。伊賀伊勢の軍兵数万是が
みよ亡びる。家よ紀の朝雄といふ人を。
和方をよくと。宮方を蒙りて紀国ゑ
下向し。一首の歌をよみく。歌の体へ
侍る

ちと本と我大君の国なれど
いづくゝ鬼の住みうるべき

四鬼は命をうくくこくし。善政の君よ背き。
悪逆よ与とる事。海て小天の罪のごと
不可びくば。即四方よ去く先とこそ。
千方幸よ真の弟い祇きて付とう

○高重遇示進勇

長清沙弟高重は。武義孫の合戦豊
歳八十余度。一度不足の名をこそ。紀れも
歌は大勇新田を入勇戦れば。今日と限と
こそ定め。近く歌を切くこ。宗盛ち
の南に和尚よ茶し。甲冑と学ーこ立ゑ
ら問曰。如何是勇士。徒蔵事。和尚答
て曰。吹毛急用別不如前と。高重は一
句を聞て。茶ち馬こ打乗。呂一騎
歌陣へ乱入し。茶相模守高時ゑ宿傾

長傳秀喜が嫡子。沙弥高重と名乗て。
武蔵七道三千余騎をうつて妻子引
お殺ひ。涙の義へ近あてお模入道のお
つまた東勝寺へ立うつり。一所とうつく
自害しをわり

○經正常陸国雅

中后宮亮經正は。經盛の嫡子也。其幼時
仁和寺へ居くし日夜琴笛を事とした。
琴笛は秘曲をつくして名人の聞えあり。
小岡合戦は本曾義仲の為に向られしが。
かつる孔雀の中にも。近江の湖色よ新出沖
の方を眺望して。ものをつくしをれけり。
古の折作は（本信宮々る小信傳
は琴笛をまち。經正これをとつて弾く
神おも感ずるが如し。感通ゆ〳〵。
白竜と現し經正の神乃上にあらはれ。

〇中

〇て感涙して琴笛とけをたまはり
きはのち一谷の合戦は武蔵の住人
河越小太郎重房がくるふ所をうけ
なくなきとゝめしをわり

〇重忠岸投車迫

源平の軍は源九郎義経宇治川の岸
中へ作らるゝ川の流ぶるとして事問せよ先
陣をたちて經盛敵の見参へ入ると
のゝまへ富士三千余騎河をうんと進むとて。
作木橋に素也でうり。扨てはいかと重忠も
打出でゝ。二人は郎が新つ矢は馬の鼻
ぶつ〳〵射させぬまじ弓杖をつきあり
こちらは岩波甲の天色へさかつとれし
う帝しうば。乃屋をくぐつくひ入り岩
つのきをのあぐんとせ一面よ後ろむず
と組て落とそれが主逆うり。水ぐ鎧よまくん

て馬をゑびいてとらんとす。ひとつも和殿ゆうなる人にまさるなとけらられて海へはいらんとす。ゑけうんで岸のゆこに新ど投る。源ゆうげられて川岸にとろてと立ゆて大ゆ力ようひらきあて。武義のゆれ信人大ゆ月の源ゆ手迫。宇治川おゆ立のゆはゆうと名ゆ高ゆ。ゆ海ゆ立ゆく。突て第ゆゆの梦ゆ。ゆげゆ紅いやまざゆうり

○赤松長山爭力

赤松源ゆ氏憲い常に赤ゆの軍をぬまず。徒卒く戰く。徒負ゆんてゆをゆ。家に長山ゆを引手とんゆて大力のゆてこ。あひい革の縅よ。竜阪の甲と云。五人半のゆ力よ。大ゆさうれぬりりうハまゆうをおろげ。人ゆ大ゆなげるれ新ゆ。ゆゆして落ゆる。赤松ゆてゆて天ゆ

歌うとあるうくれば長とかくと笑てよい
世のいて法深さを[illegible]。和合せまいてまた。
斧とかく中のうちを唱て能んと折る
を素れいそはうの斧の柄とちうと
とは。長と奪ひれどもとれば赤仁奪ひん
とくらべいと思いるかくとかをあ引合
うぐあひるまたーとする樫の木れ樺中ちう
うとあらわるるとうんは長と斧い赤
わが方ちそこ[illegible]はうける

○市中歎人霊死

唐土に商人あり。市の中にあそび潜よ
二升をにうつ門に出さしむる舟い大升と用。
知て出とあいふさ升を用ひ事あり。
或日雷電ひしてにしく祈りて[illegible]地
ひ落つあり彼者雷のあるこれ死
と。天くれく是をうつ。脊のとうり二口

口月八三文字あり。諸人彩集て是を
伝よ。其ら意伝授る者で。時に道人の馬
ひ[illegible]て乃を当るあり。文字のゆに[illegible]
敷を[illegible]人に示し。市中用小升と使
つ人皆驚て[illegible]人を顧に其仁方と知と

○鄧ま人傷増妍

呉の孫和の妾。鄧ま人い容貌を美し
て。寵他に絶ちう。一日孫和酒を汲く
大に酔。妾と思し戯ふ。鄧ま人
の頬に中て傷つ。ちう。国く医師に請
て是をけくうう。白さ瀬の髄と雑玉
と搗和の屑と伝浸く調和ちうて白
銀を以て。其痕に傳時に疵痕多く
して治しうる伝たの頬に赤さ點ありて
痣のゆ。東いよく其妍をまと多の
麗女皆是をうちゆ似をて臙脂をく

頰に點じ。其竈をもとめける

○孔子絲穿九曲

孔子衛を去て陳に過る途にて。二女の桑
を採てゐるを見。子曰南枝窈窕北枝長と。婦
の曰。夫子陳に往で必粮を絶ん。九曲の
珠に糸は通しまずと得ども。ば。其よく語
桑を採女に問へ。孔子聴して去。已に陳
に至るに。國の大夫甲兵を起て是を囲
み果して九曲の珠を出して。孔子にあたへ
糸を貫しむ。若能穿通さば。其厄を救
さんと也。孔子わざいとして。桑を採
女の言ひ用ひて。門人をして其家へ至て
しめるに。女なかれど。但桑の枝と土一塊と。
糠三簇とを残せり。顔回子貢に謂く
いはく。木の為ししに土を加へば杜の字也
甜は必杜氏なるべし。糠三簇は必名は

これ姉と妹なりん。即問果て其家
に至る。其母仍く女なれ出でゝて一の
瓜をあたふ。子貢が曰。瓜子は内にあり。ぬすつは
令愛女の家にあらん。其母驚て乃
呼出て見せしむ。女をそへていて。蟻の細
腰に糸をつなぎて九曲の珠の穴に入。
あしより烟をもつて是を燻し。孔子其
言のごとくにす。乃能糸を穿通して。後に
およそ粮を得て。本七日にして其圍を
まぬかれたりけり

○嫗氏甖中出猿

巴嫗といふ者の頂に甖あり。杖觧して
納囊のごとくにて。常に琴瑟の声
あり。是をうるさく思ひて。或日刃をもつて
打破んとしけるに。甖の中より一の猿
出で走り去。其色は黄なる冠を着

ふる者あり。てい化を知て云。予い藥の中の猿也。本是老猴の精也。五百年ふる蛟と友し仕をす。是よ天勅よ命とけて蛟を誅しのち。猶長ふる者を尋ん冊ゐる所を陪とべき所をいとど。此が頂の中にくし出り。前よ我出る痕の疵。未全どして負痛ば。鳳凰と神の所仕て。紀亡膏と求ゝ使べしといて去。是以奇ゝして。其言り

さてゝる果て其傷全もろ

○注善斬人作酒

唐の葉法善いゝ。道術を悟り。一日朝よ入く粉々の士と會合して。酒屋酒のわん事をゝ。ゝ人ゝ麹黍米ゝ粉て酒中に入。是善小き劔を包して是を斬。手に順て落化して。瓶槌酒器也となる。中に美酒あり。各所で是

を欲ずしき楽を保つべし

○祀二子生四種

往昔夫婦ありて子なし。神に祀て是を求ふ。果て有身と。月已に累て生ず。待の物を得べし。其露の祓。三よい寶囊四よい七節の杖なり。夫婦欣び合て曰。吾只一子を求んと願ふ。更に餘物を生ずべし。復神の社に至りて。重て更に求んを祈る。時に神明現じて曰。汝子を求て何の益あるべし。夫婦答て。子なくば吾身を保んを欲と。神の曰。宋れ汝に用ゐ盡さなく。其露の寶囊に含て減ずべし。而も百病を消滅と。拾貧囊に用いて賊盜とる事なし。七節の杖に邪暴を拂い悪欲を摧き安全を致と。且汝兒を

あるの法あり。時に夫婦感歎動して室に帰る。是を用ゐ更に盡る期なく。其富廣く家門に及びぬるとぞ

作者　保井恕庵編述

畫工　大森搜雲子筆

享保十九龍集甲寅陸月上絃

剞劂成功流布新本不免翻刻

京師銅駝坊書堂泉屋

楊文軒子　山口茂兵衛開版